

「見え消し版」が、なぜ記者の手に？

古瀬 敏（静岡文化芸術大学名誉教授）

20代後半の2年間だけだが、係長として霞ヶ関勤務の経験がある。科学技術庁の国際課であった。そこで、記者クラブの存在の功罪をすこしばかりだが、体験した。

記者にとってよい点は、仲間がいて目的意識を共有できるということ。役所がやりたい方向に向けて世論を構築するのに協力することもできる。

あるいは、役所の施策に、内心では異議をもっている行政担当者から、問題点を知ることができ、それをもとにして批判論を展開することも可能である。もちろん後者は、記者がその内容を理解して論陣を張れるだけのネットワークが必要だが。

悪い点は当然のことながら行政の広告塔になってしまうことだろう。

プレスリリースをそのまま受け売りするだけでは、報道の存在価値はなく、いわば官報があれば足りることになる。

海外特派員は、記者クラブ取材と比べるとずいぶんかけ離れている側面があるだろう。

国ごとに政府の仕組みは異なる。おまけに母国語以外でやりとりせざるを得ないという本質的なハンディがある。滞在期間も相対的には短い。

ある国の言葉を自由に操れるようになるのに3年必要という説を聞いたことがあるが、まさにその3年で市川さんは帰国されている。国内ほどには、取材人脈を構築するまでに至らないのではないかと？ そうした中でたぶんひどく苦労して取材して記事を送っているのだらうと感心する。

市川さんは、役所の広告塔になることなく、認知症戦略の新オレンジプランが、精神病院の意向を受けた政治家によって精神病院の役割を書き込ませられたことを明るみに出した。

この動きを、内心快く思っていなかった行政担当者が「見え消し版」をわざと渡したのか、あるいはこの問題にあまり関心ないけれど、いわばCcで回覧された担当者が無造作に放り出したか、さてどちらだったのだろうか？

しかしそういった怪しげな動きがあったらしいと気がついていなければ、ていねいにチェックせずに終わっていたかもしれない。

直感力が重要だということかな。